釈日本紀における韓国系固有名詞の声点について

朴　　美　賢*

1．はじめに

釈日本紀は卜部兼方が父親の兼文の日本書紀の講演録と平安時代の注釈書を参考にして完成した13世紀末の注釈書である。日本書紀講演（書紀講筵）は日本書紀編纂の翌年から985年まで公式的に７回にわたって行われており、漢文である本文を日本語で復元して読み上げる形式であった。教授である当時の博士や尚復の音読は声点も含めて「師説」として伝わり、釈日本紀は日本書紀講筵の完成本であると言われている。

釈日本紀の巻16から巻22は「秘訓」であり、この秘訓は日本書紀の使用字句に秘伝的な古訓や声点を記しているもので、中には古代韓国系固有名詞をも多数記載している。日本書紀30巻にみられる韓国系固有名詞の大部分を網羅しており、古代韓国系固有名詞の訓法は釈日本紀によって成り立っていると言って過言ではない。また古代韓国系固有名詞には９割近く声点が加点されており、声点の研究資料における釈日本紀の位地は高いと言える。

日本書紀の声点については高山倫明、森博達、中村雅之の一連の研究により日本書紀の歌謡における音仮名は平安時代京都アクセントを反映しており、特に中国人（続守言、薩弘恪）の担当とするα群（巻14～巻21、巻24～巻27、巻30）の原音声調の一致率がβ郡より高いことが明らかになっている。また鈴木豊（2018）は巻14～21（αⅠ）は原表記を多く採用しているのに比し、巻24～27・30（αⅡ）は原音声調とアクセントを考慮して表記を改めていると論じている。

釈日本紀における韓国系固有名詞の漢字音については尹幸舜（1996、1999）は日本呉音、日本漢音の他に古音を反映しているものが多数みられる複雑な様態であると論じている。しかし、韓国系固有名詞の声点と日本呉音、日本漢音との関連についてはまだ調査されておらず、また古写本との関連など声点に関する研究は十分とは言えない状況である。

このような背景から、本稿では釈日本紀の秘訓における韓国系固有名詞をとりあげ、概要を紹介するとともに古写本との関連、中国中古音および日本呉音・漢音との対応について論じる。

2．釈日本紀における韓国系固有名詞の声点の概要

釈日本紀の声点は圏点と線点の二種類がみられる。韓国系固有名詞の圏点は延べ語数1451点、使用漢字種類は556字であり、線点は延べ語数527点、使用漢字種類は195字で圏点が多数を占めている。

＜表１＞韓国系固有名詞の声点別分布

	平声	上声	去声	入声	計
圏点	300 (53%)	86 (15%)	80 (14%)	88 (16%)	556
線点	138 (71%)	48 (27%)	7 (4%)	1 (0.5%)	195

＊釜山大学校日本研究所研究員

３．中国中古音の声調との対応

釈日本紀の多数を占める韓国系固有名詞の圏点を対象に中国中古音との対応[1]をみると、次の＜表２＞のようである。ただし、韓国系固有名詞に複数の声点が見えるもの、中国中古音に複数の声調があるものは対象外にした。中国中古音の声調と区別するため本資料の声点はＡ（平声）・Ｂ（上声）・Ｃ（去声）・Ｄ（入声）で表示する。中国中古音の対応資料は『漢字古音手冊』（増訂本、郭錫良編）を利用した。

＜表２＞単数圏点と中国中古音との対応

	A	B	C	D	計
平	92 (73%)	13 (10%)	18 (14%)	20 (2%)	125 (43%)
上	25 (60%)	8 (20%)	8 (20%)	0 (0%)	41 (14%)
去	37 (74%)	2 (４%)	11 (22%)	0 (０%)	50 (17%)
入	4 (４%)	2 (２%)	0 (０%)	68 (97%)	74 (25%)
計	158 (54%)	25 (８%)	37 (13%)	70 (24%)	290

中国中古音との対応例は以下のようである。

平声↔Ａ：嘉、哿、甘、監、邯、强、開、乾、健、姑、崐、科、掛、翹、群、勤、斤、堂、敦、郎、崘、隆、林、琳、明、潘、封、賁、三、相、祥、霜、生、仙、宣、成、雖、需、淳、升、承、臣、身、楊、余、如、延、虞、元、原、威、儒、夷、仁、慈、章、悛、頂、周、池、珍、辰、姫、徴、嗟、滄、参、昌、滄、清、聰、推、麁、隹、春、忠、沖、侵、呑、豊、風、皮、韓、函、賢、紅、花、桓、輝、休、欽、興（92字）

平声↔Ｂ：官、奇、經、綦、摹、盤、方、菩、禪、厳、提、初、欣（13字）

平声↔Ｃ：杆、堪、昆、琨、光、今、金、曇、陵、西、僧、牛、恩、鷹、將、前、丁、耽（18字）

平声↔Ｄ：劦、烏（２字）

上声↔Ａ：廣、卯、已、姐、主、定、考、起、魯、買、昴、美、寶、舍、散、水、遠、有、稔、典、取、菡、項、解、好（25字）

上声↔Ｂ：野、尹、保、氏、壤、五、井、左（８字）

上声↔Ｃ：掠、柳、拔、洗、紹、旱、峴、後（８字）

去声↔Ａ：固、賀、段、賈、敬、季、灌、禁、對、帶、臺、妙、問、半、分、鼻、使、四、尚、細、用、位、義、二、帝、第、咒、俊、衆、進、賛、判、被、護、孝、訓、勲（37字）

去声↔Ｂ：抃、補（２字）

去声↔Ｃ：既、命、背、聖、市、宴、羿、肖、太、漢、欠（11字）

入声↔Ａ：鹵、即、栢、則（４字）

入声↔Ｂ：葛、域（２字）

入声↔Ｄ：覺、角、甲、乞、谷、國、及、汲、級、吉、達、答、宅、督、得、洛、臘、列、喙、勒、木、勿、物、博、朴、發、白、百、伐、福、北、弗、薩、昔、碩、釋、雪、速、率、宿、述、習、寔、室、實、押、億、閾、葉、屋、益、一、壹、灼、嫡、積、適、切、卒、竹、集、戢、鐵、築、卓、乇、弼、劦（67字）

韓国系固有名詞に使用されている中国中古音（原音声調）は平声43%、上点14%、去点17%、入声25%である。これは平声が上点と去点の合計を上回る一般的な漢字の割合に準じている。

一方、韓国系固有名詞に加点されている声点は平声（54%）、上声（８%）、去声（12%）、入声（23%）で平声が半数を占めている。これは釈日本紀の声点が原音声調をそのまま反映したものではなく、韓国系固有名詞を平声（低平調）に発話したことを意味する。このような平声点への加点傾向は古写本と同様な結果であり、韓国系固有名詞の声点の特徴とも言える。

４．日本呉音・日本漢音との対応

４．１　日本呉音との対応

日本呉音の対応資料は『観智院本類聚名義抄

和音分韻表』「九条本法華経音」、日本漢音の対応資料は「長承本蒙求分韻表」『新漢音分紐分韻表』を利用し対応を考察した。

その結果は次の＜表３＞のようである。

＜表３＞単数圏点と日本呉音との対応

圏点／日本呉音	A	B	C	D	計
平声	62	4	8	2	76
去声	49	11	13	1	74
入声	1	0	1	31	33
計	112	15	22	34	183

日本呉音と対応する用例は以下のようである。

平声↔A：賈、江、開、敬、稽、固、觀、廣、久、勤、禁、内、尼、段、帶、量、萬、妙、問、未、美、寶、部、比、鼻、使、四、舍、散、尚、細、施、身、用、有、義、二、印、自、藏、定、頂、帝、第、助、主、咒、衆、志、至、進、捻、推、取、侵、破、解、好、護、訓、休、欽（62字）

平声↔B：野、委、左、欣（4字）

平声↔C：曇、命、世、背、聖、耽、漢、後（８字）

平声↔D：若、切（２字）

去声↔A：甘、乾、過、灌、翹、群、能、堂、臺、林、買、明、微、山、三、生、宣、成、水、須、淳、承、臣、辛、余、如、遠、威、爲、伊、夷、慈、章、長、典、周、酒、支、知、祇、珍、清、麁、陀、波、風、行、賢、桓（49字）

去声↔B：經、奇、方、保、菩、夫、禪、壤、厳、五、致（11字）

去声↔C：堪、光、今、既、金、令、陵、西、盛、言、宴、牛、将（13字）

去声↔D：蓋（１字）

入声↔A：即（１字）

入声↔C：拔（１字）

入声↔D：覺、甲、谷、國、級、吉、達、答、宅、得、列、勒、白、百、福、弗、昔、釋、速、率、習、室、實、押、億、益、一、卒、竹、集、鐵（31字）

日本呉音では上声の割合が極めて少ないが、釈日本紀における対応でも上声はない。＜表３＞からみるように日本呉音との一致は平声と去声がもっとも高く、去声はA点（平声）に加点される割合は66％であることに対しC点（去声）に加点される割合は17％にすぎない。上昇調を低平調に発話したことを意味する。これは前田本日本書紀、図書寮本日本書紀においても同様な傾向である。

４．２　日本漢音との対応

＜表４＞単数圏点と日本漢音との対応

圏点／日本漢音	A	B	C	D	計
平声	61	5	10	1	77
上声	23	8	3	1	35
去声	23	1	6	1	31
入声	1	1	0	32	34
計	108	15	19	35	177

平声↔A：嘉、强、江、開、稽、姑、灌、觀、能、尼、臺、敦、隆、林、明、毛、微、潘、封、分、山、三、祥、霜、仙、宣、成、須、淳、承、施、辛、楊、余、如、延、于、虞、原、儒、伊、仁、慈、章、藏、長、知、参、推、陀、呑、波、平、豊、韓、行、香、賢、桓、休、興（61字）

平声↔B：經、菩、厳、移、初（５字）

平声↔C：金、陵、西、僧、言、牛、鷹、將、前、丁（10字）

平声↔D：烏（１字）

上声↔A：賈、廣、鬼、怒、買、寶、比、散、水、元、遠、有、義、稔、典、頂、主、酒、取、項、許、護、孝（23字）

上声↔B：錦、補、夫、氏、野、五、尹、左（18字）

上声↔C：堪、昆、柳、洛（４字）

去声↔A：季、固、帶、量、妙、問、四、舍、尚、素、用、二、印、自、定、帝、第、俊、志、進、便、被、好（23字）

去声↔B：致（１字）

去声↔C：既、盛、聖、太、漢、後（６字）

去声↔D：蓋（１字）
入声↔A：栢（１字）
入声↔B：葛（１字）
入声↔D：甲、谷、國、及、汲、級、吉、答、得、木、博、發、白、百、福、北、雪、速、率、宿、述、習、寔、實、一、壹、積、適、卒、竹、築、卓（32字）

日本漢音との対応をみると平声、上声、去声はA点（平声）に、入声はD点（入声）に対応し、上声および去声の平声化が見られる。つまり釈日本紀の韓国系固有名詞の声点は日本呉音・日本漢音をそのまま反映していないことがわかる。

５．日本書紀古写本との比較

また岩崎本、前田本、図書寮本などの日本書紀古写本と声点の一致率を調べると、以下のようである。

１）岩崎本『日本書紀』との一致

完全一致：柯、迦、渠、灌、觀、翹、鬼、岐、金、内、達、曇、喙、流、勒、梨、摩、味、福、部、弗、斯、善、世、洗、率、習、伊、慈、長、積、定、竹、之、遅、徴、聰、平、恵（39字、51.3％）
部分一致：奈、多、大、道、都、羅、武、彌、法、比、士、沙、素、須、首、阿、餘、王、雲、委、爾、子、弟、佐、智、知、叱、豊、慧、興（30字、39.4％）
不一致：堪、軍、買、僧、自、周、欣（７字、9.2％）

２）前田本『日本書紀』との一致

完全一致：伽、甲、稽、官、貴、鬼、斤、既、金、怒、能、段、達、得、等、騰、流、里、劦、磨、木、伴、百、本、部、冨、備、費、娑、斯、城、率、淳、辛、楊、余、王、于、委、恩、伊、已、雌、灼、将、姐、前、定、政、主、洲、竹、即、枳、池、遅、戢、且、参、呑、耽、巴、波、便、平、布、恵、和（68字、48.5％）
部分一致：加、干、蓋、高、久、君、軍、岐、己、那、奈、寧、奴、尼、多、徳、刀、東、羅、礼、鹵、喙、婁、利、麻、莫、末、慕、母、牟、武、文、汶、彌、背、不、夫、比、師、沙、上、消、須、信、阿、安、爾、日、適、殿、佐、州、支、智、知、至、叱、次、肖、破、奚（61字、43.5％）
不一致：昆、奇、列、伐、新、臣、失、尹、足、哆、太（11字、7.8％）

３）図書寮本『日本書紀』との一致

完全一致：伽、加、柯、迦、甲、開、渠、稽、官、灌、觀、鬼、斤、既、金、内、女、寧、能、多、達、大、嶋、得、等、騰、羅、郎、呂、令、聆、流、隆、勒、陵、梨、里、劦、摩、磨、買、明、木、妙、武、味、伴、拔、白、福、部、冨、北、弗、備、費、斯、舎、善、洗、率、淳、習、身、辛、我、若、厳、宴、王、于、威、恩、意、伊、已、子、慈、雌、灼、章、長、積、前、定、帝、主、周、洲、竹、衆、即、之、枳、池、知、遅、徴、且、肖、摠、聰、呑、太、波、破、跛、平、布、豊、恵、和、興（113字、61％）
部分一致：干、蓋、高、久、君、貴、岐、己、那、奈、奴、尼、曇、徳、刀、道、都、良、礼、鹵、喙、利、麻、莫、末、昧、慕、母、牟、文、汶、彌、背、法、不、夫、比、士、師、沙、世、素、首、信、阿、安、陽、餘、委、柔、爾、適、弟、佐、州、支、智、至、津、叱、次、奚、慧（63字、34％）
不一致：昆、琨、軍、列、伐、新、自、足、欣（９字、５％）

日本書紀古写本と完全一致および部分一致を合わせると90％以上であることから釈日本紀における韓国固有名詞の声点は古写本の量的不足を補う資料として利用価値があると言える。

まとめ

本稿では釈日本紀における韓国系固有名詞の声点を調査し、声点資料としての可能性について考察を行った。声点のうち圏点を対象に中国中古音、日本呉音、日本漢音との対応をみると、中国中古音をそのまま反映しているとは言えず、また日本呉音、日本漢音のどちらか一方から影響を受けているともいえない。韓国系固有名詞は平声に加点される傾向が強い。これは日本書紀古写本と比較すると同様の結果であり、釈日本紀における韓国系固有名詞の声点は古写本の量的不足を補う資料として利用価値があると言える。

参考文献

鈴木豊（編）(2003)『日本書紀人皇券諸本 聲點付語彙索引』アクセント史資料研究会、pp.1-526

――― (2008)「岩崎本『日本書紀』声点の認定をめぐる問題点」『論集』Ⅳ、アクセント史資料会、pp.95-110

――― (2010)「日本紀講書とアクセント－『日本書紀』声点本の成立に関する考察－」『論集』Ⅵ、アクセント史研究会、pp.17-42

――― (2018)「『日本書紀』α群の万葉仮名―原音声調と日本語アクセントとの対応―」『論集』ⅩⅢ、pp.1-21

高山倫明（1981）「原音声調から観た日本書紀音仮名表記試論」『語文研究』51、九州大学国語国文学会、pp.13-20

中村雅之（2013a）「対音資料研究法叙説―case1：日本書紀α群の音仮名（Ⅰ）」『KOTONOHA』123、古代文字資料館、pp.31-34

――― (2013b)「対音資料研究法叙説―case1:日本書紀α群の音仮名（2）」『KOTONOHA』124、古代文字資料館、pp.29-31

――― (2013c)「対音資料研究法叙説―case1:日本書紀α群の音仮名（2）」『KOTONOHA』125、古代文字資料館、pp.15-19

沼本克明（1995）「呉音・漢音分類表」築島裕（編）『日本漢字音史論輯』汲古書院、pp.160-164

――― (1997)『日本漢字音の歴史的研究』汲古書院、pp.216-227

権仁瀚（2005）「岩崎本『日本書紀』의 声点에 대한 一考察―韓国系固有名詞資料를 中心으로」『大東文化研究』52 성균관대학교 대동문화연구원、p.318

朴美賢（2014）「前田本『日本書紀』한국 고유명의 声点에 대하여」『일어일문학』62 대한일어일문학、pp.67-81

――― (2015)「圖書寮本『日本書紀』에 보이는 한국계 고유명의 声点 연구」『일어일문학』66、대한일 어일문학회、pp.1-16

――― (2016)「兼右本『일본서기』에 보이는 한국계　고유명사의 성점（聲點）연구」『일본어문학』74일본어문학회、pp.21-42

尹幸舜（1996）『日本書紀諸写本に存する訓法の研究』中央大学大学院博士学位論文、pp.296-321

――― (1999)「釈日本紀에 나타나는 古代韓国系 固有名詞의 漢字音에 대해서」『日本語学研究』４、韓国日本語学会、pp.125-139